



『魔法先生ネギま! もうひとつの世界』

第二話

『探すぞ僕の仲間たち!』

原作 赤松健

〔登場キャラクター〕

ネギ・スプリングフィールド

絡繰茶々丸

長谷川千雨

犬上小太郎

エヴァンジェリン

チャチャゼロ

フェイト・アーウェルンクス

電子精霊 1 (こんにゃ)

電子精霊 2

電子精霊 3

電子精霊 4 (ねぎ)

電子精霊 5・6・7 (セリフなし)

魔獣

タコもどき

ネギ

□ネギの夢の中

「う……どうなったんだ……」
うめきながら立ち上がるネギ。

あたりは静まりかえっており、霞のような砂埃が一面を覆っていて何も見えな
い。

遠くには微かにゲートポートが見える。

「くっ……何も見えない」

ネギ、立ちこめる砂埃を手で払いながら

「みんなはどうしたんだ？ ヤツラは……ぐっ」

と、不意に苦痛で顔を歪めるネギ。

右肩を見ると石の槍で貫かれ、傷口からは血があふれ出ている。

「右肩が熱い……？ そうだ……！ 右肩をやられたんだっ」

ズキズキとつづく傷口を押えるネギ。

痛みを「らえ、仲間を捜そうと歩き出す。

「マスイぞ、このままじゃ全員やられちゃう。まき絵さんやゆーなさん達も
いるのよ」

荒い息をつきながら、仲間の名前を呼ぶネギ。

「刹那さんっ……アスナさん」

ふと、砂埃の中に刹那のものらしい人影が見える。

「刹那さん！」

ネギ、喜んで駆け寄るが、その人影が刹那の石像であることに気づき、ギョッ
とする。

「まさか……永久石化!？」

ふと何かの気配に気づいたように右方を向くネギ、どこかの石像を見つめる。

「……のどかさんっ」

さらに周りを見渡すと、刹那やのどかのほかに、ネギの周りに古菲、ハルナ、
アーニヤ、夕映、和美の石像もあり、ネギを取り囲むように立っている。

「あ……あ……あ」

声にならない声を出しながら、それぞれの石像を確かめていくネギ。そうす
ると、さらに多くの石像が砂埃の中に立っていることに気づく。

「まき絵さんまで……」

まき絵の石像を見て、過呼吸のように息が荒くなるネギ。

「そんな……どうして」

不意にネギの後ろから声が聞こえる。

「君に力がないからだよ」

「！」

フェイト

ネギ

ハッと振り向くと、明日菜の石像の後ろから「ツツツ」と足音を響かせてフェ
イトが姿を現わす。



フェイト 「そんな中途半端な力で、関係のない人間を巻き込んで、しかも父親の消息を知りたいだけだった?」

鼻で笑うように短くため息をついて目を閉じるフェイト。

フェイト 「…あきれ果てるね」

そして目を開けてネギを冷たい眼差しで見つめる。

フェイト 「あの学園で、平和に楽しく日々を送ってあげたいものを」

そう言った瞬間、バキヤツという音とともに、明日菜の石像が碎ける。

フェイト 「何故、こんな所に来たの……ネギ君?」

ネギ 「!」

ズグンとつづくネギの右肩。

明日菜の石像の上半身が音もなく落下。それを見るネギの目が大きく見開かれる。

そして次の瞬間、地面に落ちた明日菜の顔が碎け散る。

□オープニング

□ジャングル・岩場

ネギ 「うわあああああッ」

叫び声を上げ、飛び起きたネギ。

あたりには獣や鳥の鳴き声がこだましている。

ネギ 「あ……あれ……?」

体を起こすと、額から濡れタオルが落ちる。

あたりを見渡して

ネギ 「どこって森……ジャングル?」

ネギ、ふらふらと立ち上がって

「なんだか怖い夢だったな……。頭がまだポーツとする……」

離れたところから水音が聞こえてくる。ネギ、水音に向かって歩く。

□ジャングル・水辺

視界が開け、池が見えてくる。そこには全裸で水浴びをしている茶々丸の姿。

茶々丸、ネギに気づいて

茶々丸 「ネギ先生……」

「茶々丸さ……って、わあああ?」

全裸の茶々丸を見てうろたえるネギ。

「いけません、まだ動かされては」

茶々丸、裸体を隠しもせず慌ててネギに駆け寄る。

茶々丸 「大丈夫ですか、お加減は?」



ネギ 「え…あ…」

茶々丸、ネギの額に自分の額を当てて

茶々丸 「ああ、やはり熱です。38度3分」

ネギ 「あ、ちよ、ちや、茶々丸さん」

ネギ、茶々丸の裸体を見て赤くなる。

ネギ 「(慌てて) まずは服を着てくださいっ！何で裸なんですかっ」

茶々丸 「新ホディになって水洗い可になったので丁度水浴びを…」

ネギ 「とにかく服、着てくださいっ」

茶々丸 「…何故です？」

ネギ 「なぜでもですーっ」

茶々丸 「(真剣な表情で) いいえ、私よりもネギ先生です。胸を石の槍で貫かれたのです。完全回復呪文とはいえ、完璧ではありません。安静にしていな

ネギ 「え、胸を…」

茶々丸の言葉にハッとするネギ。

茶々丸 「ええ」

× × ×

石の槍に肩を貫かれ、倒れるネギのシーンがフラッシュ。

× × ×

ネギ 「そうだ！あれからどうになりました！？奴らは！？みんなは大丈夫ですか！？」

ようやく事態を思いだし、茶々丸に詰め寄るネギ。

茶々丸 「あれから9時間57分が経過。フェイト・アーウェルックス以下4名は、転移呪文で逃走。『白き翼』メンバー及びあの場にいたものは、敵魔法使いの強制転移呪文により、散り散りに飛ばされたものと思われず。消息は不明…」

ネギ 「散り散り…そんな…」

茶々丸の報告を聞いて青ざめるネギ。

ネギ 「フェイト…アーウェルックス…」

× × ×

ゲートホートでのフェイトのセリフ。

フェイト 「中途半端な力ほど無様なモノはないね。そう思わないか？ネギ君」

× × ×

ネギ、悔しさと怒りに歯噛みする。

ネギ 「くっ…」

□ジヤングル

ネギが明日菜のバクテイオカードを額に当て、必死に呼びかけている。



ネギ 「アスナさん聞こえますか、聞こえたら返事をー!」
 ネギ しかし明日菜からの返答はない。ネギ、残念そうに茶々丸の方を向いて
 「ダメです」
 茶々丸 「ネギ先生」
 茶々丸 焦りの表情を浮かべ、岩山に向かって走り出すネギ。
 「ネギ先生、動いてはダメです」
 茶々丸は慌ててネギの後を追う。

□ジャングル・岩山の頂上

風鳴りがする中、息を切らしながらゆっくりと岩山の橋に向かって歩を進めるネギ。目の前には一面のジャングルが広がっている。
 茶々丸がネギの後ろに立っている。

ネギ 「茶々丸さん、僕はどれくらい飛ばされたんでしょう」
 ネギ、振り向いて、切羽詰まった表情で茶々丸を見つめる。
 「皆とどれくらい離れてしまったんでしょうか?」
 「少なくとも千キロ単位で飛ばされたかと」
 「……………そんな」

茶々丸の言葉に眉を曇らせるネギ。

茶々丸、ふと何かに気づいて「気づいて
 「そうです、ネギ先生、バッジをー」
 「え」

「『白き翼』のバッジです!これにはいくつかの機能がありますが、他のバッジの位置を探知する機能が…」

茶々丸、ネギからバッジを受け取ると掌にバッジを載せる。レーダーが起動し、耳のアンテナが伸びる。地平線の彼方をじっと見つめて、

「いましたー北西に2つ、100キロ地点と180キロ地点です。他には……………東北東540キロに1つ存在していますが数が足りません。おそらく探知限界の1800キロを越えているものと……」

× × × × × ×
 ゲートホートでのフェイトのセリフ。

「僕から君へのプレゼントだよ」

× × × × × ×
 ネギ 「……………く、どういふことか……………」
 歯噛みするネギ。

茶々丸 「……………世界地図を出します。先生、我々とみんなの位置を特定できるかも」

茶々丸、ネギの方を向いて

茶々丸 「ネギ先生、総面積は我々の地球の3分の1ほどですが、この『魔法世界』



茶々丸

ネギ

(ムンドゥス・マギクス)は、それでも尚……広大です」
風鳴りの中、淡々と状況を伝える茶々丸。
「私達がああ麻帆良学園に無事戻るためには、この広大な世界から仲間達を探し出さなくてはならなくなったようす」

「……」

絶望的な現状を聞いて、ギョツと唇を噛みしめるネギ……。

□サブタイトル

□エヴァンジェリンの家・玄関の外(朝・回想)

ウェールズへ向かう日の朝。

トランクを持った茶々丸が、エヴァンジェリンとチャチャゼロに一礼して、

「では行って参ります、マスター」

「……ああ、いーから早く行け」

「マスター、昨日も随分遅くまでネギ先生と話し込まれていたようですが……」

「奴もまだ未熟極まりないから言い合めておくことも多くてな」

「そうですか。私はまた、いざ送り出すとなると……(エヴァに口を左右に広げられて)心配で心配でいれもらっれもいられはふらっれひらおふあおおもふえ」

「貴様はいつからそーゆー口をきくようになったかな!お、柔らかい。いい仕事だなハカセ」

「もあふらおあふえ」

エヴァンジェリン、茶々丸を離して、

「そーう貴様はどうなんだ」
「え」

「(ニヤツとして)最近、あのぼーやのことが気になって仕方ないようだな」

「な……いいえ、そんなことはありません、いけません、そんなに巻かれてはあああ」

途中から、エヴァンジェリンに後頭部のゼンマイを巻かれて悲鳴になる。

「巻いてやる巻いてやる!」

「(離れて2人を見ながら)小学生ノ喧嘩ミテータガ……」

エヴァンジェリン、茶々丸を離して、

「……まあいい。ぼーやを頼むぞ。ヤツがいなくなると私がつまんからな……などと命令せずとも、今の貴様ならヤツを守るだろうがな」

見透かされて、ドキッとなる茶々丸。

「マ……」

茶々丸

エヴァ

エヴァ
チャチャゼロ

茶々丸

エヴァ

茶々丸

エヴァ

茶々丸

エヴァ

茶々丸

エヴァ

茶々丸

エヴァ

茶々丸



チャチャゼロ

「ケケケ」

エヴァ

「まあ……この旅では自分の気持ちに素直に、な」

茶々丸

茶々丸、顔の前で人差し指と人差し指をくっつけて、照れたような仕草で、

「マスター……」

そこに現実のネギの声、

「……さん、……丸さん」

ネギの声

□ジャングル・見晴らしのいい高台の上(夜)

回想と同じポーズの茶々丸に、後ろからネギが声をかける。

「茶々丸さん、僕達の位置がわかりましたよ」

茶々丸

「ハ、ハイ」

ネギ

慌てたように、ネギに振り返って、

茶々丸

「では皆さんの位置を照合してみます」

ネギ

「ハイッ」

エヴァの声

茶々丸が地図を広げて、ネギもそれを覗き込もうと寄ってくる。

エヴァの声

「とはいえ今回、そういった厄介な事態に陥ることはまずなかつ。せい

茶々丸

せい楽しんでいっ」

茶々丸

茶々丸、ネギと並んで地図を見ながら、

茶々丸

「……ハズレですマスター……。どうしましょう」

茶々丸

周りからは、ジャングルの生物たちの「ギャアッギャアッ」「グゲゲゲゲッゲッ」

茶々丸

などという鳴き声が聞こえてくる。

茶々丸

「そういった厄介な事態に陥ってしまったようです」

□ジャングル・崖際(夜)

魔法世界の地図。

茶々丸

「……これが『魔法世界』全地図です」

ネギ

「スゴイ……これが世界地図だなんて……本当に『異世界』なんですわ……」

茶々丸

焚き火の横で、ネギと茶々丸、地図を覗き込んでいる。

茶々丸

「幾人かは比較的近い範囲に飛ばされているようで助かりました」

ネギ

「現在位置」と書かれた点の近く「A」「B」と書かれた点、山脈を越えた東側

茶々丸

「」の点。

ネギ

「これが誰かはわからないんですね」

茶々丸

「残念ながら……」

ネギ

ネギ、立ち上がり、

茶々丸

「行きましょう、茶々丸さん……」

ネギ

「え。いけません！まだお体が……」

茶々丸

「僕の心配より皆の心配が先です……」

ネギ

言いかけて、目眩がしてよろける。



ネギ 「う……」
茶々丸 「やはり無理をされるから……。朝までは横になってください」
ネギ 「(焦って) く……くそっ……!」

□ジャングル全景(朝)
朝日が昇り、ジャングルを照らし出す。
生き物たちの鳴き声が聞こえる。

ネギ □ジャングル(朝)
茶々丸 出発準備をしたネギと茶々丸。
ネギ 「よしっ、朝だ。行きます!」
茶々丸 「ハイッ」
ネギ、いてもたってもいられず駆け出す。
茶々丸 「あまり急いではもぢませんよ」
茶々丸も後に続く。

□ジャングル
ジャングルを駆けていくネギと茶々丸を点描で。
木々を間を縫うように駆けたり、
巨大な生き物をやり過ごしたり、
茶々丸のジェットで崖向こう岸に運んでもらったり……など。

ネギ □ジャングル・湖のほとり
茶々丸 大きな湖に着いた2人。
ネギ 「わあ……」
茶々丸 「先生、ここで休みましょう。かなり具合が悪そうですよ」
ネギ 「え……ダ、ダメです! 何とか日暮れまでには一人目の場所へ……」
茶々丸 「先生が倒れては元も子ありません」
ネギ 「……………! (悔しそう)」

ネギ そこでズズウン! という足音。
茶々丸 「え……」
ネギ 気が付けば、すぐ側で凶暴そうな魔獣が、2人に襲いかかろうと身構えている。
茶々丸 「しまっ……虎……竜!?!」
魔獣 「ネギ先生!」
魔獣 「グルッ……」

魔獣 魔獣の角から電撃が発生して、放たれる。
ネギと茶々丸は横に跳ねてかわす。



ネギ

「くっ」

ネギ、着地する前に、魔法を放つ。

ネギ

「魔法の射手・光の三矢ー!! (サギタ・マギカ・セリエス・ルーキス)」

ネギ

でも魔法は魔法障壁で反らされる。

魔獣

「魔法障壁!? 野生の生き物が…!?」

魔獣

「ゴアッ」

魔獣の雷撃に打たれるネギ。魔法障壁で防ぐが、ダメージは完全に消せず、

ネギ

「くあっ」

茶々丸

「先生ー!!」

ネギ

ネギ、その場にヒザを着く。

ネギ

「ぐ……」

魔獣

茶々丸がネギをかばって割って入る。

ネギ

「グル…?」

魔獣

「(苦しげに) ハア…ハア…茶々丸さ…」

茶々丸

茶々丸、鋭い目で魔獣をにらみ、

茶々丸

「異界の魔獣よ」

茶々丸

両腕を武器に変化させて、一步踏み出す。

魔獣

「ネギ先生に手を出さなければ、この私が許さない」

魔獣

「グアッ」

魔獣が大きく口を開けて襲い掛かる。

茶々丸と魔獣の戦いが始まり……。

□ジャングル・湖のほとり(夜)

ネギ

ネギが目覚めますと、ジャングルの夜空が目に入る。

茶々丸

「う……」

茶々丸

「よかった…気がつかれましたか?」

ネギ

茶々丸が優しく微笑んでネギを覗き込んでいる。

ネギ

「え…」

膝枕されていると気付き、飛び起きる。

ネギ

「わあっ!とと……ス、すみマセンッ……! あ、あれ? 魔獣は!?」

茶々丸

「何とか追い払いました。強かったです」

ネギ

「そ、そうですか。……!」

ネギ

ネギ、茶々丸の衣服が一部破れて、身体も傷ついていることに気付き、

茶々丸

「茶々丸さん!? そんなポロポロになって!」

ネギ

「い……え…私よりも先生のお体が…」

茶々丸

そう言いながらも、茶々丸は倒れる。

ネギ

「え、茶々丸さん!?!」

茶々丸

「だ、大丈夫です。少しエネルギーを消費しすぎただけ……」



ネギ

「大変だ!どうすれば!?!」

茶々丸、背中あたりを探ってゼンマイを取り出し、

茶々丸

「う…じ、実はその…私、これを1日1回誰かに巻いてもらわなくてはならないのですが…」

ネギ

「ゼンマイ…」

× × ×

緊張した様子で正座した茶々丸。

その後ろで、茶々丸の後頭部にゼンマイを取り付けようとするネギ。

ネギ

「ここに入れて魔力を込めて巻けばいいんですね」

茶々丸

「あ…あのやっぱり私大丈夫ですので、合流した後、他の誰かに」

ネギ

「ダメですよ!僕を助けて倒れたのに」

茶々丸

「うう…では、あのできるだけそと…」

ネギ、うなずいて、

ネギ

「入れますよ」

ゼンマイを差し込む。

茶々丸

「んっ…」

びくつと反応してしまう茶々丸。

茶々丸

「ご…声が出てしまいました…。(ここから声に出して) あ、あのできる

だけゆっくり……」

ネギ、キリキリと巻きながら、

ネギ

「わかりました。ゆっくりですね!」

茶々丸

「ま、魔力は弱めにいいー」

茶々丸は悶えながら悲鳴をあげる。

ネギ

「く、苦しいんですか?」

茶々丸

「い、いえ。そう言う訳では…。あの、これは魔力充填の儀式なので…そ

の…パクティオーと同じで……」

上気した顔でネギを恥ずかしそうに見ながら、

茶々丸

「き……気持ちいいんです……」

ネギ

「気持ちいい……」

ネギ、少し考え込んでから、

ネギ

「じゃあ大丈夫ですね!」

勢いよくゼンマイを巻きます。

茶々丸

「~~~~~! (言葉にならない叫び)」

ネギ、手を止めて、ちよつと心配そうに、

ネギ

「マ、マスターより、僕、下手ですか?」

茶々丸

「い、いえ、ただ大変上手なのですが、この場合どちらかというとな

方が問題……」

ネギ

「そうですか。よかった」



ほっとして、すぐにまた、

「茶々丸さんの元気が出るまでガンガン巻きまくりますねーッ！」

「ッーッーッーッーッーッー?」

「何か楽しくなってきました!」

キリキリとゼンマイを巻く音が響く中、

「助けてマスターーッ」

× × ×

ネギに背を向けて脱力している茶々丸。

「(独り言のように) マスター、超(チャオ)、こ、これで良いのでしょうか、私。何だか大幅に間違った方向に全力で進んでいるような錯覚…」

「茶々丸さんありがとうございます」

振り向けば、ネギが真剣な顔つきで茶々丸を見ている。

「……?」

「さっき茶々丸さんが助けてくれなかったら危なかったです。ゲートポ

ートでも……やっぱり僕はみんながいないと何もできない子供です」

「……」

ネギ、グツと奥歯を噛んで悔しそうに、

「みんなが…僕…そのみんなを……っ」

茶々丸、ネギに近づいて、その手を優しく握る。

「大丈夫ですネギ先生」

「茶々丸さん…」

「みんなきつと無事ですよ」

2人、手をつないだまま夜空を見上げる。

「私達の仲間…必ず助け出しましょう」

「……(うなずく)」

ネギ、不意に笑顔になってゼンマイを見せながらグツと拳を握る。

「明日からは僕が毎日巻きますから!」

「えっ…その…(困る)」

茶々丸

ネギ

□ジャングル・全景

└「38時間前」

□ジャングル

木々の間を、フード付のローブを来た千雨が息をきらせて、走っていく。

走りながら悪態をつく千雨。

「くそっ、くそっ」

ふと、ズシンという大きな足音を聞いて、はっと立ち止まる。

千雨



千雨

千雨、カロリーメイトをかじって、「夜になって星が出ないと現在位置も割り出せないんだろ？ほっとけよ」ゲートポートでのことを思い出す。

千雨

「ちっ……」

× × ×

回想。

メガロメセンブリア・ゲートポート。

強制転移魔法で散り散りに飛ばされるネギたち（#1より）。

千雨を抱かかえた茶々丸、飛ばされていくネギを見つける。

茶々丸

「ネギ先生！」

ワイヤーで手を伸ばし、ネギを捕まえる。

でも、その際に千雨を離してしまふ。

茶々丸から遠ざかっていく千雨。

茶々丸

「千雨さ……」

千雨

「おいっ、茶々ま……」

茶々丸と離れて飛ばされていく千雨。

茶々丸

「スイマセーン！必ず助けにー」

千雨

「アホー……」

× × ×

回想明けて。

千雨

「あのロボ子め…私よりあのガキを取りやがって……覚えとけ」

千雨

□ジャングル・全景(夜)

「何イッ!?!」

□ジャングル・洞窟(夜)

電子精霊たちが示している魔法世界の地図を見ながら、

千雨

「一番近くの人里まで310キロだって!?!冗談だろッ!?!」

電子精霊1

「ちうたまー、残念ながら」

電子精霊2

「何回計算しても間違いなしです」

電子精霊3

「厳然たる事実と言っか現実です」

絶句して青ざめる千雨。

千雨

「ぬぐぐぐぐ……」

□ジャングル全景

照りつける陽の下に、千雨の息切れが聞こえる。

千雨

「ハア、ハア、ハア……」



□ジャングル

憔悴した千雨が歩きながら、

千雨 「へ…へへ、これが現実とは思えねーな」

ひとり言のよつに続ける。

千雨 「気まぐれ起こして奴らに付き合ってたなきゃ、今頃クーラーの効いた部屋でのんびりネット。どう考えたってそれが私の現実だぜ。なあ、こんにゃ、ねぎ」

呼ばれた電子精霊が、フラフラしながら、

電子精霊1 (こんにゃ)「ち…ちうたま〜…」

千雨 「んっどうしたこんにゃ。元気ねえな」

電子精霊1 (こんにゃ)「僕たち電気製品がないと存在維持できないんですが、ケータイとノートのパッケージが切れかけていませんか？」

千雨、慌てて携帯電話を取り出して、

千雨 「何っむ…確かに。…ってオイッ！消えるのかよてめーら」

電子妖精2 「はい…」

電子精霊3 「ち…ちう様すみません。お役に立てず」

電子精霊4 (ねぎ)「せめて最後の力で街の方角だけでも書き残して……」

ねぎ、紙にペンで何かを書く。

千雨 「お、おい、無理すんなよねぎ」

電子精霊4 (ねぎ)「い、これを…」

「まち」あつち」という文字に矢印だけが書かれた紙を千雨に渡す。

啞然とする千雨、電子精霊たちが消えていく中、

千雨 「使えねええー………！？」

電子精霊4 (ねぎ)「ああんっ動かしたら方角がズレて…」

ねぎが力尽きて消えていく。

電子精霊4 (ねぎ)「ちう様、死なないで…ね…」

千雨 「縁起でもないこと言うなーっ！って、あ、コラしっかりしろ！ねぎ、ね………」

電子精霊が消えて、千雨はひとりになる。

千雨 「……ッ」

コクツとつばを飲み込んで、

千雨 「フ、フン…。話し相手がいなくなったただけだ…」

強がって、歩いていく。

□ジャングル・全景(夜)

木々のざわめきと、生物の鳴き声。

□ジャングル(夜)

千雨

ひとりて歩く千雨。
「ど、どこかに安全な寝床を探さないと…」

千雨

と、木々や草の揺れる音が、一際ザワザワと聞こえ出す。
「！」
びくっとなる千雨。

千雨

音は更にザワザワと不気味に聞こえてくる。

「……………」
千雨、青ざめて震えだす。

× × ×

回想

ウェールズへの出発前、日本の空港。

千雨

「もし何かあったら、てめーが守ってくれんだろ？」

ネギ

「ハ、ハイッ！もちろんー！」

× × ×

回想明けて。

千雨

「…守ってくれるつつたぐせに、あのバカヤロ…」

千雨

千雨、泣きそうだったのを堪えて、

「へ…へへ…だーれがためーなんかの助け借りるかよ。こ…この長谷川千雨様をなめんじゃねーぞ」

千雨、バツとローブを脱ぎ捨てて、ヤケのような大声で叫ぶ。

千雨

「さげんなバークッ！この長谷川千雨様に助けはいらねえッ！私は私の力で学園に帰るー！」

テンションが上がってきて、

千雨

「あのガキ、今度会ったら吠え面かくなよ！？いびってやるからなああ

あーっ」

そこに後ろからザアアと水の音。

「！」

千雨

千雨の背後の沼から、タコのような巨大生物が現れていた。

千雨

「(気付いて)へへ…」

タコもどき

「(オイチソー)」

タコもどきの目がきらーんと光り、口から伸ばした触手で千雨の足を捕まえる。

タコもどき

「(イタダキマァーッ)」

そのまま千雨を引き寄せろ。

千雨

「わーーーーっ待て待てえー！どこのB級ファンタジーだこの展開ー

ーっ。」

触手がさらに何本も伸びて、千雨を引き寄せながら、体中に絡みついてくる。

千雨

「バツバカ、てめっ」

千雨 シュウツと、千雨の靴が溶け出す。

千雨 「な…服溶かしてからゆっくり喰おうって魂胆か!？」

靴だけでなく、ニーソックス、上着なども溶けていって、

千雨 「命の危険のうえに…エロピンチ!? (ガーン!)」

さらに触手が伸びてくる。

千雨 「ちよっ……待っ……ギャーッ」

上半身の服が全て溶かされ、ニーソックスとスカートも半分以上溶かされた状態になる。

千雨 触手で高く吊るし上げられて、

千雨 「ちよっ……てめっ!こ、このちう様がタコの出来損ないみたいな不ツ細工

な……あつバカ、ソコは!」

もがくが、身動きがとれない。

千雨 「な…なんとか脱出を……!」

そこでお尻をペロンとなめられて、

千雨 「キャ……!へ、変なトコなめんなあッ」

逃れようとするが、動けない。

千雨 「ダメだっ!ファンタジーなアレにはファンタジーの力じゃねえとっ…」

タコもどきの顔が迫ってくる。

千雨 「マ……マジかよ。ホントに喰われちまうのか?こんなB級モンスターに……。こんな意味わかんねー異世界のジャングルの中で…し…死んじま

うのか私……?」

息を飲み、蒼白になる。

千雨 「誰にも知られずに……?オイ…さすがにそりゃちよいキツイぞ…」

千雨、つぶやくように、「

千雨 「…(たすけ)ろよ」

大声で叫んで、

千雨 「助けてよお、ネギ先生……っ!」

そのとき、空から人影(ネギ)が現れ、ドンッ!

とタコもどきにキック!

タコもどき 「(ぶぎゅっ!)」

続いて現れた茶々丸が、ブレード状の両腕で、千雨を捕らえていた触手を切る。

千雨 「茶々…わ!」

千雨は解放されて地面に落ちかけるが、

千雨 「!」

それをネギが抱きかかえる。

千雨 タコもどきの方を睨みつけるネギ。

千雨 「……!」



茶々丸 「大丈夫です、ネギ先生。目標は逃走しました。状況クリア」

タコもどき

「タコもどきが、
」(え〜ん)

と泣きながら逃げていく。

千雨、ネギを見上げながら、

「フ…フン…ようやく来やがったかファンタジー…」

「千雨さん…良かった無事で…本当に…」

「……………」

千雨の目に涙が溜まりだす。

「え……千雨さん」

千雨、ネギの腕から立ち上がって、

「うるさいッ」

思い切りネギを殴る。

「へぼっ」

「ちっ千雨さ…」

千雨は更に何発もネギを殴りつける。

「……………」

「みきゅー!んきゅー!」

「……………」

「あぶぶぶぶぶぶ」

千雨、殴り続けた後に一息つくど、

「おせえんだよおーっ」

「スイマセエーン! (平謝り)」

「お言葉ですが千雨さん、ネギ先生は体の無理をおして最速で……(オロ

オロ)」

夜空に、3人のやりとりが響く。

「茶々丸、てめえもだ!私よりそのガキ取りやがってー!」

「こそ、それは状況判断としてケガをした先生を一人にできず……」

「知らんっ!ー!もーてめーら2人でどっか行っちまえっ!ー!」

「お氣を確かに…あ、あの千雨さん。その、ローブを…」

「ああ!？」

「ハ……裸です…」

「なっ……う、うるさいマセガキィッ」

「はうううっ」

x x x

ローブを着た千雨、

「2人きりでイチャついてたんじゃねーだろな」

「えっ(ギクッ)」

千雨
茶々丸

ネギ
千雨
ネギ

千雨
ネギ
茶々丸

千雨
ネギ
ネギ

千雨
ネギ
千雨

□ジャンゲル湖のほとり

千雨 「メガロメセンフリアまで1万キロ!?!」

千雨が魔法世界の地図を見ながら、怒鳴る。脇では電子精霊2匹が飛んでいる。

千雨 「1万キロってどれくらいだよ!?!母を訪ねて三千里じゃねーんだぞ!?!」

千雨、ため息混じりに、

千雨 「こりゃあ、あと15日の夏休み中に学園に戻るのは無理なんじゃないか?」

また怒鳴り声になって、

千雨 「2学期には間に合わない!生徒の安否もわからない!つかそもそも帰れるかもわかんねえ!さあてこの責任、引率の天才子供先生はどうやってお取りになるつもりなんですかねえ!?!」

ネギ 「うう…」

脇で茶々丸は、オロオロしている。

ネギ 「はい…今回の自分の責任は十分わかっているつもりです」

ずーんと落ち込んでいるネギ。

顔色も悪く、息使いも荒い。

千雨、少しひるんで、

千雨 「ぬ…いやまあ、わかってんならいいんだけどよ」

ネギ 「いえ…よくありません。今この瞬間にも誰かが千雨さんのような危険に陥っているかもしれません」

具合が悪そうにフラついて、

ネギ 「全て…僕の責任なんです、全て僕の…」

言いかけて倒れてしまう。

千雨 「おいっ、どうした!?!」

茶々丸 「ネギ先生!?!」

x x x

夕方。

パジャマに着替えさせられたネギが、木陰に寝かされている。

千雨 「よっと…」

千雨がネギを抱き起す。

ネギ 「本当に…スミマセン、千雨さん…僕のせいで千雨さんを…みんなをこんな大変なコトに巻き込んでしまって…」

千雨 「いや、さっきは言い過ぎだよ。そのフェイトとかいうバカに出遭っちゃまったのも、先生のせいじゃないんだろ」

ネギ、立ち上がって、

ネギ 「…いえ、それでもマスターなら…父さんなら必ずなんとかできたハ



千雨

ネギ

ネギ

千雨

ネギ

ネギ

千雨

ネギ

小太郎の声

ネギ

小太郎

ネギ

小太郎

ネギ

小太郎

小太郎

ネギ

小太郎

ネギ

小太郎

ネギ

小太郎

ネギ

小太郎

ズです」

「あ、オイ、大丈夫かよ」

「あいつに勝てる力をつけるために修業をしてきたのにっ……」

感情が最大まで高まって叫ぶ。

「フェイト・アーウェルックス！あいつに及ばないようじゃ、いつまでも父さんに追いつけないっ」

「……」

「力が……そうだ力があれば……。力さえあれば……」

ネギ、ぐらりとよろめくが、体勢を立て直して、また叫ぶ。

「力さえあればっ！次は奴に勝つっ！僕はっ…強く…なりたい……っ！」

「まあ落ち着きなネギ先生…。まずはあんたの体をだな」

「僕のことはどうでもいいんです！そうだ、このジャングルにまだもう一人、助けを待っている仲間がいます」

ネギの肩に、後ろから手が乗せられる。

「その一人はここにおるわ」

ネギが振り向くと、「ちやかに笑う小太郎がいた。

「えっ、「タ……っ」

「ハッハッハ、この……」

小太郎、思い切りネギを殴り飛ばす。

「ぶけっ……」

「ダアホがあー……っ……っ！」

そのまま吹き飛ばされて、湖の湖面を滑っていくネギ。

なんとか静止し、湖面で片ヒザ立ちして、

「コッ……「タロー君……」

「ったく、見損なうでえホンマ」

湖面のネギを睨んで、

「過ぎたコト、グダグダ悩みよってよー飽きんわ！！お前の趣味は悩み」

トか……っ……」

「う……」

「今のお前がいくら力だけつけても、絶対サウザンドマスターには届かへんわ」

「(ムツときて) な……何……っ……」

「もちろんフェイトにも。…せやな、多分アスナ姉ちゃんにも届かへん」

「……」

「何が足りんかわからんやろ、今のお前には。そんなことやから、あいつ

にボロクソ完敗くらうんやで……」

「(怒り) ……ッ」

「お？お前でも少しはカチンときたか？カチンときたらどーすんねん？あ



小太郎

あー!? ネギィ!」
自分の影から犬神を出す。

「ムカついてドツク気力もないんかいッ! こっちらいくでえ!」
小太郎の放った犬神がネギに迫る。

ネギ

「く…」

小太郎

「疾空黒狼牙(しつこうこくろうが)!」

ネギはそれをかわして、

ネギ

「魔法の射手・雷の三矢(サギタ・マギカ・フルグラリス)!」

小太郎はネギの魔法を払いのけて、ネギへと突進していく。

小太郎

「ハハッ、お前に足らんモン…」

ネギ

「く……!」

小太郎

「それは、あのアスナ姉ちゃんが持つとるもんや!」

小太郎の一撃に、ネギも応戦するが、押し負けて倒れる。

2人の激突の衝撃で、辺りの湖の水が巻き上がる。

小太郎

「俺に勝ったら……教えたる!」

倒れたネギに追い討ちの一撃。

ネギは避けて、逆に小太郎に拳を入れる。

ネギ

「ハッ……」

小太郎

「…ぷ!」

それをきつかけ始まる殴り合い。

小太郎が右拳に犬神を集中させる。

小太郎の右拳が黒く変色していく。

ネギも応戦しようと、呪文を唱える。

ネギ

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル…」

小太郎、溜めを終えて突進してくる。

小太郎

「ハハッ、本気で受けんと死ぬでえ!」

「光の精霊67柱……集い来たりて敵を射て(セプテム・エト・セクサー

ギンタ・スピリトゥス・ルークス・コエウンテース・イニミグム・サギテ

ント)」

ネギの拳にも、魔法が集まり、

小太郎

「狗音爆砕拳(くおんばくさいけん)!」

ネギ

「桜華崩拳(おうかほうけん)!」

2人の技が激突する。

湖の水が、爆発したように巻き上がる。

千雨

「ラララ……おんの軍の演習だよ」

x x x

「15分後」

湖から湖畔へネギと小太郎が歩いてくる。

小太郎
ネギ
2人ともボロボロだが、遊び疲れたような笑顔。
「どや？気分もスッキリ晴れたやろ。熱も下がったんちゃうか」
「え？（額に手を当て）ホントだ！なんで？」

小太郎
ネギ
木乃香の呪文で回復するネギ。
「コノカ姉ちゃんの完全治癒呪文がすごすぎたんやろ。さっきのお前、体内でもスゴい魔力がうずまいたたて」

小太郎
ネギ
「治す方法はカンタン。体内の魔力を発散させたたらええねん」
「コタロー君。それであんな言い方…」

ネギ
ネギ、少し照れくさそうに、
「あ…ありがと」

小太郎
「えーって。水クサイな」

ネギ
「……でさ、コタロー君さっきのただけど…僕に足りないもの…」

小太郎
「ああん？勝ってもないのに教える訳ないやろ！……でもまあしゃーないな…サービスやで」

小太郎、立ち止まって、

小太郎
ネギ
「アスナ姉ちゃんにあってお前にはないもの……それは……」

ネギ
「そ…それは…」

ネギが息を飲んで、次の言葉を待つネギ。

小太郎、ニコッと笑って、

小太郎
ネギ
「アホっぽさ、かな？」

ネギ
「……アホ……？」

肩透かしを食って、呆然とするネギ。

ネギ
「ちよっとそれじゃわかんないよ」

小太郎
「ハイハイ、サービス終わり！」

ネギを置いて、先を歩いていく小太郎。

ネギ
「コタロー君ーッ！」

慌てて追いかけるネギ。

湖畔では、それを千雨と茶々丸が微笑ましそに見ている…。

※実際のアニメに収録されている音声は
シナリオと異なる場合がございます。